

第7回
大阪府立大手前高等学校
英国派遣報告書

期間2015年7月4日(土)～7月18日(土)
PENGLAIS SCHOOL
ABERYSTWYTH, WALES

SUPPORTED BY KINRANKAI ALUMNI ASSOCIATION

目次

1.	第7回訪問を終えて	1
2.	日程	3
3.	派遣生徒および引率教員	4
4.	第7回訪問の記録	5
5.	研究報告	25
6.	現地でのプレゼンテーション	36

表紙：アベリストウイスの戦勝メモリアルと夕日（7月15日20時半頃撮影）

1. 第7回訪問を終えて

本校の国際交流事業の中心となる英国派遣事業も7回目を迎えました。本年度も金蘭会の多大なるご理解、ご支援を賜り、総勢122名の応募者の中から、6ヶ月にわたる選考を経て選ばれた2年生女子5名、1年生男子1名・女子4名の計10名を英国に派遣することができました。

前回は現地教育省のホームステイに関する方針変更により、生徒達はホスト生徒の家庭に宿泊することが叶いませんでしたが、本年度はペングライス校の先生方のご尽力により、前半一週間は先生方の自宅に招いていただいたのホームステイ、後半一週間はアベリストゥス大学寮で過ごすという宿泊形態をとることができました。生徒達は放課後から夕食後までの時間をホスト生徒とともに過ごし、その後先生方宅、大学寮へと送り届けてもらいました。二週間を通じてたくさんの家庭にお世話になったことで、現地の生活の様々な側面に触れることができ、また大学寮に戻ってからの共同生活では遅くまで語り合い、その日の出来事をみんなで共有していました。

本年度の派遣では、過去の訪問において日本の伝統文化を中心に紹介してきたことを踏まえ、現代の日本の文化・流行と伝統的な文化との繋がりを主軸に発表を行いました。2年生の派遣生徒の中には、昨年度ペングライスの生徒を大阪に迎えた際に積極的に交流していた生徒も多く、彼らがどのような点に興味を持っていたかということ念頭に発表の方向性を決定してくれました。1年生も積極的に自分の意見を発言し、内容をより濃く、記憶に残るものにしようと、頻繁に議論を重ねてくれていました。また、第6回の派遣生徒として2年前に英国に派遣された3年生全員が後輩たちの激励に来てくれたことも特に印象的でした。受験に向け各々が忙しくなる合間を縫って、事前研修には毎回3年生が誰かしら参加し、現地の生徒の雰囲気や過去の発表の準備、自分たちがやっとうまくいったことや、あるいは失敗したことなど、こと細やかに1・2年生に伝えてくれていた姿は、先輩として非常に頼もしく映りました。

行程中何もかも順調というわけではありませんでした。特にバーミンガム空港に到着直後、生徒・教員合わせて5名のスーツケースが届かなかったことは、大きな動揺を招きました。しかし、生徒たちは「なかなかしたくてできる経験ではないよね」と、早い段階から気持ちを前向きに切り替え、現地の先生方やホスト生徒に事情を話して衣服や必要な物品を借りていました。プレゼンテーションに必要な物についても、万が一発表までに届かなかった際に備え、別のバージョンを考えておくなど、様々な事態を想定して行動してくれていました。最終的に4日目の朝、小学校への訪問でペングライス校から出発する際、駐車場に入れ違いで入ってくる運送会社のトラックに生徒が気がつき、無事スーツケースは還ってきました。「もう何があっても大丈夫」と、非常に安堵した表情を見せ、直後の小学生との交流では堂々とした、自信に満ちたプレゼンテーションを行ってくれました。

最初の3日間は雨風が強く、天気予報では2週間ずっと雨予報でしたが、4日目からは夜の間だけ激しい雨が降り、昼間は曇りがちながらも時折小雨が降るのみと、天候には恵まれました。「ウェールズは天気が非常によく変わるけれども、この10日間の天候はきっと生徒たちの前向きな気持ちに対する treat(ご褒美)ですね」と、お別れ会ではペングライス校の校長である Matthew Brown 先生からもお言葉をいただきました。

末筆ながら、今回の交流に関わっていただいた全ての方々に感謝します。国際交流委員会の先生方をはじめ、不在期間中快く授業を代わってくださった英語科の先生方、部活動の生徒をまとめあげてくださった先生方、その他多くの先生方のおかげで、我々12名は素晴らしい時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。そして誰より、すばらしい時間を過ごせるよう、四方八方に気を配って頂いた田中先生に感謝します。

兼崎 信一郎

今回の英国交流では、何もかもが新鮮に感じられました。

まず、バーミンガム空港からアベリストゥスに向かうバスから見える景色に目を見張りました。アベリストゥスに近付くにつれて、どこまでも広がる丘陵地と、その広々とした大地に羊をあちこちに見ることができました。

ちょうど到着する9時頃に日没を迎えました。日本では夏でも夜の9時頃は暗いのが当たり前ですが、アベリストゥスでは夜でも明るく、着いた当初から数日間はその明るさに不思議な感覚を抱かずにはいられませんでした。

また、ペングライスの先生のご自宅での夕食会に招待していただいた時には、日本人の私にも合う家庭料理のおいしさと、温かさを感じました。生徒たちと一緒に未経験のサーフィン体験し、自然の中での楽しみを満喫することもできました。今思えば、日本での暮らしでは考えられないほど、夕方以降に活動していたと思います。アベリストゥスの人たちは、仕事を終えてからも家族や友人たちとの時間、趣味の時間を持ち、人生をより充実させているようでした。そのような人たちとの交流を通して、人生を楽しむ余地がたくさんあることを教えられたような気がします。

アベリストゥスの自然の雄大さに癒され、ゆとりのある異文化の生活を肌で感じられたことは、本当に素晴らしい経験でした。しかし、何より良かったと思うことは英国交流に参加させていただくことがなかったら、知り得なかった方々との出会いや交流です。ホストティーチャーを引き受けて下さった先生方をはじめ、今回交流に関わって下さった全ての方々が、思いやりの気持ちをもってコミュニケーションをとろうとして下さったおかげで、私の緊張していた気持ちもほぐれ、不安は徐々に解消されていきました。こうしたことは、ペングライスの生徒たちに温かく迎え入れていただいた大手前高校の生徒たちも感じていることだと思います。

英国交流の中で強く感じたのは、この交流がこれまで交流に関わってこられたペングライスと大手前、両校の先生方、生徒たちのお互いを思い合う感謝の絆で続けられているということです。私も来年迎える側として感謝の気持ちをもってご恩をお返しできたらと思っています。

最後になりましたが、英国交流に際し、多大なるご支援をいただいた金蘭会の皆様方、プレゼンテーションの準備を熱心に指導して下さった国際交流委員の先生方、アベリストゥスでの楽しい時間を共にした、頼りになる兼崎先生とチャレンジ精神旺盛で希望に満ちあふれた生徒たちに心から感謝致します。

田中 理絵

2. 日程

日次	月日	地名	現地時間	交通機関	概要
1	7月4日(土)	関西空港集合 関西空港発 アムステルダム着 アムステルダム発 バーミンガム着 バーミンガム発 現地 SA(夕食休憩) アベリストゥス着	8:15 10:25 15:10 16:20 16:35 17:30 18:30 22:00	KL868 KL1431 バス	関西空港4F 国際線ロビー Dカウンター付近集合 空路、アムステルダム経由 でバーミンガム空港へ。空 港よりスクールバスにて移 動
2 ↓ 13	7月5日(日) ↓ 7月16日(木)	アベリストゥス			ホストファミリー宅で朝 食・夕食。姉妹校ペング ライス校の授業に参加、近郊 の史跡見学、日本文化紹介 活動等
14	7月17日(金)	アベリストゥス発 バーミンガム着 バーミンガム発 アムステルダム着 アムステルダム発	11:25 13:35 14:40	KL1424 KL867	スクールバスにて バーミンガム空港へ 空路、アムステルダム経由 で関西空港へ
15	7月18日(土)	関西空港着 解散	8:35 10:30		関西空港1F 国際線到着ロ ビーにて解散

アベリストゥスでの活動

前半：ホストティーチャー宅に宿泊		後半：アベリストゥス大学寮に宿泊	
7月4日(土)	16:35 バーミンガム着 バスにてアベリストゥスへ (途中夕食休憩を挟む) 22:00頃 Penglaisの先生宅へ	7月11日(土)	9:00 カーディフ散策 18:00 カーディフ出発 夕食後、大学寮へ
7月5日(日)	13:00 ホスト生徒と対面 夕食までホスト生徒と 過ごす 21:30 ホストティーチャー宅着	7月12日(日)	日中 ホスト生徒と過ごす 21:30 大学寮へ
7月6日(月)	9:00 ハーレック城見学 16:30 ホスト生徒宅へ 21:30 ホストティーチャー宅着	7月13日(月)	午前 大学での講義 放課後 ホスト生徒と過ごす 21:30 大学寮へ
7月7日(火)	8:00 Ysgol Gymraeg(小学校)へ 日本文化発表①その後、高校に 戻り、授業 放課後 ホスト生徒と過ごす 21:30 ホストティーチャー宅へ	7月14日(火)	午前 日本文化発表③ 放課後 ホスト生徒と過ごす 21:30 大学寮へ
7月8日(水)	9:00 お菓子作り 11:20 日本文化発表② 放課後 カヤック体験	7月15日(水)	オークウッドテーマパークへ 21:30 大学寮へ
7月9日(木)	午前 授業 午後 国立図書館 夕方 サーフィン体験	7月16日(木)	午前 授業 17:30 お別れパーティー 21:30 大学寮へ
7月10日(金)	9:00 調理実習(スーツケース持参) その後、Sports Day 放課後 ホスト生徒と過ごす 大学寮へ	7月17日(金)	6:00 バスでPenglaisを出発

3. 派遣生徒および引率教員

学年	組	番号	氏名
2	1	1 1	中島 千夏 Chinatsu Nakajima
	2	1 0	角 春佳 Haruka Sumi
	4	4	岩間 結子 Yuiko Iwama
	5	1 3	中尾 多福 Tafuku Nakao
	8	9	高嶋 あゆみ Ayumi Takashima
1	1	2 0	守實 友梨 Yuri Morizane
	2	1 0	西村 真衣 Mai Nishimura
	4	1 5	松本 日花里 Hikari Matsumoto
	6	9	河村 晴実 Harumi Kawamura
	6	2 8	小出 健太 Kenta Koide
引率教員			兼崎 信一郎 Shinichiro Kanazaki
			田中 理絵 Rie Tanaka

4. 第7回訪問の記録

派遣生徒達のリレー形式による日記です。(日付下の枠内は教員記述)

7月4日(土)

8:15に関西空港集合。ご家族の方々、中嶋先生に見送られて出発。関西空港を定刻どおりに離陸後、およそ40分の遅れでオランダ・スキポール空港に到着。乗り換えの時間はほとんどなく、おいしそうな匂いの漂う売店を横目に一路乗り継ぎの飛行機へ。約1時間でパーミンガム空港に到着。厳しい入国審査(兼崎の場合、教員になって何年目か、ペングライス校との交流は何年目か、受け入れの担当者の顔を知っているか、何がきっかけで交流が始まったか、宿泊先から生徒が行方不明になった際にはどのような連絡網になっているか、等々を延々と聞かれました。こんなに長い入国審査は初めてです)を終え、スーツケースを受け取りに。15分ほど待ったところでターンテーブルから荷物が回ってこなくなる。ここで生徒4人及び田中先生のスーツケースがロストバゲージとなっていることが判明。苦情申し出カウンターで手続きをし、当座の生活用品(といっても歯ブラシとTシャツしか入っていなかったのだが)を受け取り、肩を落としながらも、ペングライス校の先生方との待ち合わせ出口へ。すぐに以前大手前を訪れた Katherine Porter 先生、Janette Elgood 先生、Adrian Wells 先生を見つけ事情を説明。荷物が1日も早く届くよう、Wells 先生がもう一度カウンターに念押しをしに行ってくれたあと、現地時刻午後6時ごろよりスクールバスでペングライス校へと移動。前回同様シュールズベリーのマクドナルドで夕食とトイレ休憩。現地時間の午後9時半(日本時間では午前5時半!)にペングライス校に到着。迎えに来てくれていた先生方もロストバゲージのことを聞きつけ、荷物が届いていない生徒たちと田中先生が快適に荷物の到着までを過ごせるようにするからね、と声をかけてくださり、ようやく少しほっとする。荷物が無い不安を抱えながらも、まずは長い1日の終わり。



空のターンテーブルを見つめる

待ちに待った出発!! 出国の際にはさみを捨てられる。一つ目の飛行機の中では、映画を4本見て一睡もしなかったせいか、二つ目の飛行機に乗ってから物凄い眠気が襲いかかってきて、パーミンガムに着いた時には白目をむいていた。

入国審査やスーツケースのことでバタバタしたのは覚えている。ペングライスの先生方が迎えに来て下さって、バスで熟睡。途中マクドでいっぱい食べて、また熟睡。9時過ぎ頃にペングライス校に着き、そこで初めてそれぞれのホストティーチャーが発表され、それぞれの家に向かった。その道中に車内から、まるで映画のセットのような街並みや夕陽に照らされる海を見て感動した。ホストティーチャーはとても優しく素敵なお夫婦だった。寒かったので温かいお茶を頂いて、荷物の整理などをして、深夜2時頃、日本時間で朝8時に眠りについた。長い1日だった。

2年生 中尾

7月5日（日）

午前中はホスティーチャー宅で。家の近所の案内をしてもらったという生徒が多かった様子。13時にペングラス校の Six Form（今後我々の控え室となる部屋がある建物、主に11・12年生が利用する）に案内され、ホストチュードントと対面。簡単な全体挨拶のあと、ホストチュードントに連れられて個別行動へ。21時半にホスティーチャー宅に帰宅。

夕刻、KLMに荷物の状況を問い合わせ。スキポール空港で全ての荷物が見つかったと聞き、一安心。これで翌日には荷物が届く、と思ったのだが…。



飛行機で生じた腰の痛みと、時差ボケのせいで、朝5時に目が覚めてしまった。9時に優雅に朝食をとり、ホスティーチャーの犬3匹を散歩させながら、ペットの馬を見に行った。間近で見た馬は、めっちゃでかくて迫力があり、追いかけてきたから怖かった。孔雀も野放しで飼われていて驚いた。鳴き声がうるさかった。そして13時にホストファミリーと初対面。私はLornaと気が合いそうで、これからがとても楽しみになった。日花里ちゃん、Rubyと一緒にLornaの家で、坊主めぐりやすごろくをした後、Tea Partyをした。Lornaがケーキを作ってくれていた。2時間くらい、いろんな話をして楽しかった。そのあと、街の散策。カラフルでお洒落、住みたい。ただ日曜でほとんどのお店が閉まっ

ていて残念だった。ビーチでアイスクリームも食べた！そしてLornaの家で夕食。パスタで、Lornaはベジタリアンなのだが、私は事前調査で肉が好きと伝えたので、ミートソースとベジタリアン用ソースの両方をつくってくれた。おいしくて嬉しかったが、少し申し訳なく思った。充実していて1日があっという間に終わってしまう。

2年生 中尾

7月6日(月)

8時30分にペングライス校に集合。生徒達はSix Formでホスト生徒としばし待機。その間に兼崎・田中は職員室に通され、Matthew 校長より全体にご紹介頂いた。簡単な挨拶と謝辞、2週間の抱負を語り、職員朝礼は終了。

9時半、ペングライス校の13~14歳の生徒達と共にハーレック城へ。この日の天候は非常に厳しいものだった。“See! This is Wales!”とは前半のスケジュールを組んで下さったElgood先生のジョーク。11時半に到着し、その後城内を散策、庭で昼食を、という予定であったが、とても屋外で活動できる天気ではなく、1時間ほどで散策を切り上げ、近隣のカフェへと避難。ペングライスに戻る途中、雨が一瞬上がるのを見計らって海岸でホストに用意してもらった弁当を食べた。

16時頃にペングライス校に戻り、その後はホストスチューデントと行動。21時半にホスティチャー宅へと戻る。

荷物は未だ届かず。夜にKLMに問い合わせると、アベリストウスに向かう運行便が今日はなかった、とのこと。日本と同じ感覚で宅急便はすぐに届く、と考えていたのが甘かった。こちらに向かう便は火曜日と金曜日しかないらしい。

今日は朝から雨。風も強いし、寒いし最悪の天気だ。こんな日にハーレック城に行くなんて・・・。食卓へ向かうとエルグッド先生はもう朝食を作ってくれていた。ワッフルだ！イギリスではワッフルやパンケーキにnutellaというチョコレートペーストを塗って食べるのが定番らしい。私は勿論ワッフルにnutellaを塗って食べた。おいすぎて、天候のことを考えていた時のブルーな気持ちはどこかへとんでいってしまった。

ハーレック城はバスで約二時間走ったところにある。出発してしばらくすると、雨による湿気と人の密集した匂いがバス酔いを誘う。やっぱり今日は最悪の日かもしれない。そんなことを考えていた時、追い討ちをかけるようにバスの中に生ごみのような臭いが漂ってきた。誰かがお菓子を食べだしたらしい。生ごみ風味のお菓子を食べるなんてどうかしてる！！

バスがとまったのは坂道の手前だった。どしゃぶりの中、坂道をのぼる。まったくいつになったら城につくのだから。

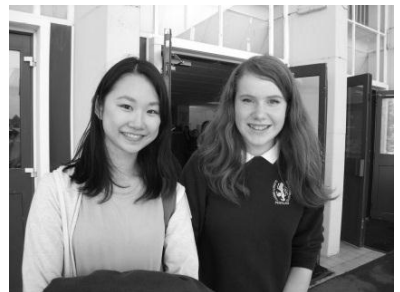
ようやく城に到着した。やっぱりすごい！「天空の城ラピュタ」のモデルになったといわれているが確かに似ている。ペングライス生と城の中をまわることになった。城内はまるで巨大な迷路のようだった。すべてが石でできている。これだけの石を集めて、城を建てるのにどれだけの月日を費やしたのだろう。

城内探検の後、城の付近のカフェに入った。一緒にまわっていたペングライス生がイングリッシュティーをおごってくれた。強風と雨のせいで体はすっかり冷えていたので、いつもの何倍もおいしく感じた。

探検が終わると、再びバスへ。私は先程いっしょにまわった生徒の一人、フレアの隣に座った。彼女は日本語にすごく興味があったので私はいくつか教えてあげた。するとフレアも私にウェールズ語を教えてくれた。楽しい！！すごく気が合うみたいだ。

昼食休憩のためバスは海辺にとまった。するとペングライス生はなぜかバスの外へ。まさか・・・、この雨の中で弁当を食べるつもりなのか！予想は的中。背の高い草とたくさんのカモメに囲まれ、さらに雨の降りしきる中で私たちは昼食を食べた。昼食を終えた後、学校へ戻るためバスに乗り込む。バスの中でフレアが「緑茶飲む？」と水筒を渡してくれた。一口飲んで驚いた。甘い！！フレアに聞いたところ、蜂蜜が入っているらしい。不思議な味だったけれど、おいしかった。

学校に着いてから私はフレアと明日も会う約束をした。外国の子とこんなに楽しく会話をしたのは私にとって初めての経験だった。天候は最悪だったけれど、素敵な思い出がたくさんできたのですばらしい一日だったと思う。



2年生 中島

7月7日(火)

この日の最大の焦点はスーツケースがちゃんと届くか否か。10時より Ysgol Gymraeg (“Ysgol” は「学校」、 “Gymraeg” は「ウェールズ語の」を表すウェールズ語、ウェールズ語のみで授業を行っている小学校である) に訪問し、1度目のプレゼンテーションを行う予定になっていたからである。もしスーツケースが届かなかった場合を想定して、前日に打ち合わせはしていたものの、やはりせっかく準備したものが無いというのは悔しい。

9時半。ペングルイスから出発するため Elgood 先生の車に乗り込む最中に校門から入ってくる運送会社のトラックを生徒が見つかる。もしやと思って近寄ると、5つのスーツケースが！大急ぎで受領のサインをし、荷物を取り出して小学校へ。

「もうなんも怖いもんじゃないわ！」とはスーツケースが届いた1年生。言葉通り緊張も何もかもが吹っ切れて、小学生相手に全力で妖怪体操を披露。最後には小学生たちを巻き込んで一緒にダンス。終了後も、人懐っこい小学生達がいつまでも妖怪体操で私たちが帰途につくのを見送ってくれていた。

放課後はホスト生徒宅でBBQ。天候は相変わらず、どんよりとしていたものの、雨は時々ぱらつく程度。ようやく運が開けてきた。

午前は Ysgol Gymraeg (小学校) へ。日本、大阪、大手前高校の紹介、日本語講座、プレゼンテーションを行った。子供たちは皆私たちの話を聞き、ところどころ発言もしてくれた。妖怪体操第一はノリノリで踊ってくれ、大成功だった。その後、向こうの方から歌のプレゼントを頂いた。小学生らしい元気よさと、小学生とは思えない声の綺麗さにとても感動したし、驚いた。



午後はあいにくの雨で Sport Day が延期になったので、午後は授業を受けた。日本とは違い、授業中はわからないところがあればすぐに質問、それに先生が1つずつ中断しながら答えていくという、自由な感じであった。その代わりほとんどの生徒は先生の授業を熱心に聞いていた。

After school, Japanese students and host students enjoyed a BBQ at one of our host family's home.

We ate Welsh meat, sausage, bread and cake. After eating, we enjoyed playing. Especially I found the game like Kori Oni very interesting. I was tagged by the demon many times but my host, Hannah helped me. I was very glad.



Also we went to the beach near the house. It was very cold. But the scenery there was very beautiful.

1年生 守實

7月8日(水)

8時半にペングライスに集合。今朝は June Wells 先生 (Adrian 先生の奥様、校長先生をはじめ、ご夫婦で同じ学校に勤めているという先生も多く、日本の学校との違いを感じる) から Welsh Cake の作り方を教わる。普段台所に立たないという生徒達も多く、「女子力! 私にもっと女子力を!」と叫んでいた2年生も。ただ、計量は全て実習助手の先生が済ませておいてくださったので、正しい順番で、適切なこね方をすれば、だれが焼いても美味しくなるあたりホットケーキとよく似ている。「あとでカヤックに出かけるので夜食にとっておくといいわ」という Wells 先生からの助言もあったが、焼立てはとても美味しく、控え室に戻る頃には半分になった生徒もいた。

午後はペングライス生への発表、昨日の小学生向けのプレゼンよりは少し難しい話も交えた、伝統文化と現代文化の発表を行った。阿波踊り、妖怪体操ともにペングライスの生徒も一緒に踊ってくれていた。

19時、湖にカヤックへ。何という湖なのかを聞いてみたが、一緒に行動していた先生によると「わからないわね、でもあそこの家の人の湖よ」とのこと…。個人所有の湖って日本にあるのかな…と思いつつライフジャケットをつけて湖へ。水温は外気温の割に高く、21時前になっても心地よい。途中1羽の鳥が目の前を滑空する。

“Swan!” インストラクターの先生が叫ぶ。「白鳥がこの季節たまにこの湖に立ち寄るんだ! ラッキーだったね!」

このようにして、名前不明の湖は「白鳥の湖」となった。

朝は Welsh Cake を作った。Welsh Cake とは、ウェールズの伝統的なお菓子で、手順は小麦粉、卵、バター、砂糖、そしてレーズンを混ぜるだけという簡単な手順だった。簡単に作ることができるのに、とても美味しかった。

その後、Alysha の授業に参加した。その日は化学だった。まだ習っていない範囲だったのでついていけなかったが、大手前の授業で早く習いたいと思った。

昼からは1回目の日本文化のプレゼンを行った。緊張と不安で、お昼ご飯を食べられなかった。見に来てくれたペングライス生は、阿波踊りと妖怪ウォッチのダンスに参加してくれて、日本のポップカルチャーについても興味を示してくれたので私たちみんな安心して次も頑張ろうと思った。

放課後は、ホストファミリーの Alysha の家に行って家族と話したり、作ってくれた美味しい夕食を頂いた。日本のテレビ番組があり(日本でいう SASUKE)、驚いた。夕食のあと、YouTube を使って日本とイギリスの人気のある歌手について話した。去年 Alysha は大手前に来ていたが、それがきっかけで日本が好きになり、アニメや音楽を通して日本語を勉強していると話してくれてとても嬉しかった。



日が沈むのがとても遅いので、19時頃からカヤックをした。車で少し行けばすぐに湖に着いた。インストラクターの方たちはユーモアのある人で、蓮の花をヘルメットに着けてくれたり、カヤックの上に立とうと言ったりして私も挑戦した。初めてだったが楽しかった。

2年生 角

7月9日(木)

8時半。ホストチューデントの家族が経営するアメリカンダイナーに招かれて全員で朝食をご馳走になる。2時間目に間に合う時間に学校に戻り、授業を受ける。今日はPHSE(Physical Health and Social Environment) Dayという位置付けらしく、全ての先生が「糖とカフェインに対する依存」を中心に授業を行っていた。

午後はアベリストウィス大学の裏手にある国立図書館へ。英国内で出版されたものは新聞に至るまで全て1部ずつこの図書館に収蔵するのが決まりとなっており、日本でいう国会図書館と同じ役割を果たしている。

放課後はホストファミリーと過ごし、19時にボースの海岸に集合。サーフィンを行う。兼崎・田中も含めて全員が初体験。誰もボードの上に立つには至らなかったが、ボードの上に寝そべてパドリングをしているだけでも波との一体感を感じ、なんとも楽しいひと時であった。

夕食に先生方が買い出しに行ってくださったフィッシュアンドチップスを食べる。赤焼けの海岸を見ながら手づかみで食べる。口内の塩味も相まって、思い出に残る夕食であった。

朝食はAmerican Dinerでパンケーキでした。Mrs. Wellsと岩間先輩、中尾先輩と行き、4人での朝食だと思っていたら、他のホストティーチャー宅の生徒も来て、ほぼ全員での朝食でした。白いパンケーキに塩味がよく効いたベーコンがのっており、小さなグラスに入ったお茶そっくりのシロップが添えられていました。案の定一人がお茶と間違えて飲み、「あまっ」とショックを受けていました。おかげで私は間違わずに済みました(笑)。午前中はPenglais校でカフェインの危険性についての授業を受けました。エナジードリンクの飲みすぎで依存症になった女の子の話などがありました。何故か私たち数人は二連続で同じ内容の授業を受けることになりましたが、先生によって授業の仕方が違い、面白かったです。

昼食は食堂で買って済ませ、午後は少し歩いたところにある国立図書館に行きました。係の人が図書館の裏側を案内してくれました。たくさんの古い本や地図、絵画などが保管されていました。大事に保管するために温度や湿度が調節されているところはなんだかアクション映画に出てきそうな通路でした。



ウェールズ国立図書館

Mrs. Porter took Iwama senpai and me to the supermarket. We looked for sweets for souvenirs. And looked at cheeses and breads. We bought some of them. Then we went to Mrs. Porter's house to change into swimsuits. Mr. Porter gave us some breads and fruits. After eating them, Mrs. Porter took us to the beach. Soon, other students came there. We started surfing. It was the first time for me. Instructors taught us how to surf. One of them used three Japanese words, "nami," "koko," "oyogu." It was difficult for me to stand on a surfboard. But I had a lot of fun! After surfing, I felt so cold. We seated on the beachside and ate fish and chips. It was too large but very delicious.

1年生 河村

7月10日(金)

英国交流7日目。今日は雨で延期されていた Sports Day が開催される。2時間目からの開催に先立って、我々は June 先生に Cawl というウェールズの伝統的なスープの作り方を教わった。煮込みに時間がかかるので昼休みに戻ってくるよう伝えられる。火の番を June 先生にお任せして、我々は Sports Day へ。開会式や入場行進等はない。広大なフィールドを利用して、陸上競技を行う生徒もいれば、クリケット・テニス・バスケットボールといった球技を行う生徒もいる。テニスに飽きたらクリケットと好きなタイミングで種目を移り変わることもできる。放送卓では、流行の音楽とともに、生徒達が応援メッセージを読み上げ、会場を盛り上げている。自由だ。

昼休み、先生方とともに Cawl を食す。一口大に切った野菜とラム肉を煮込んだスープだが、数種類のハーブとともに煮込んでいるからか、ラム肉特有の臭みは全くない。

昼食後に大学寮への引越しを行い、その後ホストと合流。自由行動となる。

21時半にかけ、ばらばらと生徒がホストファミリーに送られて帰ってくるが、前半のホストとは今日でお別れのため、また今日で学校を離れるホストスチューデントもいたため、名残り惜しい別れとなる。



今日で、英国派遣も折り返しです。そして明日からは大学寮（ペンブリン）で寝泊まりするので、ニューボールド先生やトムと会うのはもうほとんど最後です。朝食後、学校に到着した後、1週間のお礼を言い、シックスフォームへと向かいました。

The postponed sports day was held today.

At first we played tennis. When we played tennis, Leo came to us. He said he would go for a school

excursion from July 11th, and that he would not be able to see us anymore. Therefore, we played tennis together.

I knew that he could speak considerably good Japanese. Because it was the last day, we decided to talk in Japanese. We talked about a lot of things, for example, about our school and our future dream.

Then we played basketball. Because I had played basketball when I was a junior high school student, I wanted to do it with him. It was really pleasant to play basketball under the blue sky. Because he said, "I have played basketball," I told him the shooting form. He was pleased about it.

After we arrived at the dormitory, I said, "See you again" and "I'm looking forward to seeing you in Osaka." I felt sad but I could have a very good time with him.



1年生 小出

7月11日(土)

朝から2週目担当のホストチューデントと(1週目と重複する生徒もいるが)とともに首都カーディフへ。約3時間のバス移動となる。途中 St Fagans National History Museum に立ち寄り、ウェールズの郷土史を学ぶ。農家の暮らし、室内装飾の変遷、城での生活等々。15時頃にカーディフに到着し、そこからはホストとともに自由行動へ。土曜日ということもあってカフェやパブのテラスでは昼からビールを飲む人々が多く、夕方になるにつれ町のいたるところでパーティーが開かれていた。何のパーティーか尋ねてみたところ、とくに理由はないパーティーらしい。パーティーをして盛り上がりたいたいからパーティーをしているのだそう。自由だ。

右の写真は Jamie Oliver のレストラン。彼のおかげで英国の食のレベルは格段に向上したらしい。テレビ番組に出演することで英国中にグルメブームを巻き起こしたのだとか。特製ソーセージを使ったパッパルデッレがとても美味しかった。



今日はカーディフまで2時間バスに乗らなければならなかったのが、午前6:00起床だった。私はいつも午前6:45に起床していたので、少し早いように思った。朝ごはんのシリアルを食べ、8:10にバスに乗り、いざ出発。バスの中ではエアコンが効いていて肌寒かったのが降りると暖かく感じた。

午前ミュージアム散策だった。そこは思っていたのと違って、公園のようだった。



ミュージアムにはほかに鶏や豚などの動物もいた。

歩いていくと、昔の製糸業に使われていた機械や昔の人が住んでいた家が再現されていた。機械はもちろん手で労力を考えると大変だろうと思った。家はどれも広く、一つの家につき寝室が3つくらいあった。理由はゲストを迎えるためだという。それにしても、今の家では考えられないほどの豪華さだった。

午後3時からは再びバスに乗りセンター街へ移動した。そこは大きなスタジアムやビルが立ち並んでいる近代的な

ビルもあり木もあるカーディフの中心となる場所



都市だった。私たちはそこでたくさんの店に行き、買い物をした。道を進んでいくと、イベントブースで小学生がバレエをしていたり、アクロバットパフォーマンスをしていたりと自由な雰囲気、ウェールズらしいなあと思った。私はボディクリームが日本より安かったのが買った。また、99ペンスショップもあって、1ポンド出すとおつりが帰ってくるという激安のお店もおもしろかった。その商品は決して質が劣ることがなかった。最後は疲れ果てて、帰りのバスの中でみんなは寝ていた。

1年生 松本

7月12日(日)

この日は1日朝からホストとの自由行動。兼崎と田中は先生方と市内散策。朝から教会の日曜学校に参加した。向かったのは Seion というウェールズ語のみで進行される教会。日曜学校離れが進む中、夏休み等長期休暇の直前の日曜学校には子ども達とともに家族全員で参加するという家庭が多いそうだ。地元の人が多く出席する中で、牧師さんより日本からのゲストという形で紹介をしていただいた。新しい出会いに感謝し、旅の安全を祈ります、ということを持ってくださった。終了後には紅茶とケーキが振る舞われた。日本の日曜学校ではあまりなじみがないが、そうして牧師さんをはじめ参加した家族同士が近況を語り合ったり、雑談を交わして楽しむというのが、こちらでは定番の日曜の朝の過ごし方なのだとか。



エレキギターで
奏でられる賛美歌

この日はそれぞれのホストと丸1日自由行動だった。私はいつもどおり6時45分に起きて朝食をとり、ホストが大学寮に来るまで待っていた。ホストは家族全員で車で迎えに来てくれた。今日は何をするのかホストに聞くと、庭園かショッピングか、どちらか行きたいほうに連れて行ってくれるということだった。晴れていたのどちらにするか迷ったが、わざわざ庭園に行かなくても、自然と触れ合えているしなあ、と思ったのでショッピングに行きたいと言った。

約2時間後、ショッピングセンターに着いた。そこは室外で開放的な空間だった。そこには日本でもよく見かける TIGER や lush もあれば、アベリストウスでも見たことのない店もあった。その中でも気になったのが、日本のお菓子が売っている店だ。残念ながらその日は閉店していたのだが、おいしい店らしい。そして、私たちがショ



パブの前菜の
トマトスープ

ッピングをしている間、ホストスチューデントの両親がイングリッシュパブを探してくれていた。午後2時ごろ、ようやくそのパブにたどり着いた。パブといっても、日本とは違って家族でも入れるようなパブだ。店に入ると、バーカウンターで酒を飲んでいる大人たちが十何名かいたが、その奥

では家族で昼食をとっている光景が見られた。私も席に着き、ラム肉のコースを注文した。飲み物、前菜、メインのラム肉、さらにはデザートまで出てきておなか一杯になった。

そこで、次に何をしたいのか聞かれたので、歩きたいと言った。体が重かったので動いて軽くしたかった。実際にしたのは、歩くというよりも山を登るといようなことだった。その途中でホストスチューデントのお母さんが遠くを指しながら、あの方向はアベリストウスで、こっちはスコットランドで・・・と説明してくれて、英国に来た実感が一気にわいた。そのあとは家に帰った。そこで私は日本らしいポーチを渡した。鮮やかな柄を選んだので、とても喜んでくれた。すると、ホストスチューデントが事前に私がほしいと言っていたマスコットとキーホルダーをくれた。ウェールズでしか買えないものだったので、とてもうれしかった。そして、大学寮へ戻った。

パブへ行った
あとの山から



1年生 松本

7月13日(月)

アペリストゥス大学にて科学の講義と聞いていたのだが、実際にはとんでもない場面からスタート。ペングライスの生徒とともに Sir John Meurig Thomas 教授という方の Menelaus Medal 授賞式という場面に立ち会い、その後記念講演を聴くという流れであった。正装していなくて本当に良かったのだろうか…。講義の内容はマグネシウムやバリウムなどの元素を発見した Sir Humphry Davy について。彼の若い頃の着想と友人関係、愛読した書籍について語り、よい科学者になるには幅広いジャンルの本をひたすら読むのが大事、という結びであった。

その後ペングライスに戻り、ホストチュードントとともに授業を受ける。放課後は彼らとともに自由行動。慌ただしかった先週に比べ、今週は少し落ち着く見通し。

午後は、今までに受けたことが無かったメディアの授業に出席した。映画「Jurassic World」の予告編を見ながら、各シーンにどういった効果があるのかを教わった。最近の(日本では8月5日公開)題材を使用していることもあり、とても興味深くて面白かった。

放課後は、Megan と Robin と岩間さんと私でスタバのようなコーヒーショップ“COSTA”に行った。実はここに来るのは2回目。Meg が一番お気に入りのカフェとも言っていたので、ここではスタバよりも人気があるお店なのかもしれない。こちらに来て何度も思ったことだが、やはり色々なものが大きい。マグカップなど小ぶりのどんぶりくらいであるし、プラスチックカップの Small でも日本の M サイズくらいはある。

その後、Meg の家で手巻き寿司を作った。日曜日にお寿司のキットを発見し、作ってみたいかと誘われていたのだ。といっても、vinegar が無かったので酢飯を作れず、厳密に言えばお寿司ではないのだけれど、喜んでもらえたからよかった。具はツナマヨ、きゅうり、ハム、エビ、スモークサーモンに卵焼き。生魚を入手できない中でも、なかなか楽しめるものができたと思う。ホスト2人は普通の海苔巻のように丁寧に巻いていて、雑な自分が少し恥ずかしくなった。久しぶりに日本米を食べると、小麦粉よりお腹に溜まるものだと改めて気づいた。



それから、Robin の家族と合流して、卓球をした。アップテンポな音楽を大音量でかけて、おかしなことを言いあって、あちこちにボールを飛ばしまくってはしゃいだ。面白いと感じる心は万国共通。ただただ楽しかった。Robin の両親がピザを頼んでいた。パイナップルがトッピングされていたり、具が生地で挟まれてあったりと、少し違っている。卓球の後には Robin のお父さんの誕生日が明日ということで、サプライズをした。私たちも参加させてもらった。家族一人一人からプレゼントとカードを受け取るお父さん。この人たちはみんな本当に家族を大切にしている。ケーキも手作りで、温かい気持ちになった。…今日は夕飯がまるでパーティー。



←これは私がもらったものだが、小さなラムネでさえ個別に包装。袋にメッセージまで。お父さんへのプレゼントもこうしていた。お店の包装が簡素な分、自分たちでやっているのかなと思う。

1年生 西村

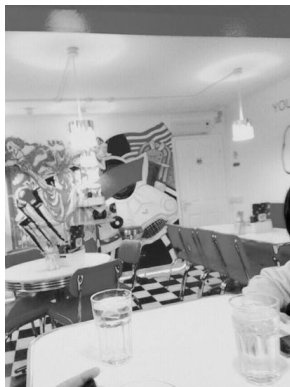
7月14日(火)

ウェールズで過ごす日々もいよいよ大詰め。3時間目のプレゼンを前に最後の準備を行うところから今日はスタート。昨夜も寮に帰った後、遅くまで議論を行った。内容の順番を変えた方がいいのではないか、前回予想以上に人数が集まっていたので、アンケート用紙の代わりに何をしよう、スクリーンに映す映像の順番はどうしよう、等々。解散後も遅くまで変更になった箇所の原稿を作り直し、読む練習を繰り返してくれていた様子で今朝は少し眠たそう。



円陣を組んで気合を入れ、いざ最後のプレゼンへ。努力の甲斐あって、大きな拍手と歓声を受け、無事日本で準備してきた全てのものを出し切ることができました。

放課後はホストスチューデントと過ごす最後の自由行動の時間。明日は Oakwood のテーマパークに向かうため、放課後仮に会えたとしてもほとんど時間がないので、ゆっくりとできるのは今日が最後。



今日はホストと過ごせる最後の放課後なので、寂しさでいっぱいだったが、楽しもうと思った。やっと楽しめるようになってきたころに帰らなければならないのがつらい。まずは、学校からホストマザーに送ってもらって、私のホストの Robin と西村さんのホストの Megan がアルバイトをしているアメリカ風のレストランへ行った。この国では、大学でのお金は自分で稼いで自分で払うのが普通だそう。そこで、早めの夜ご飯で、ハンバーガーを食べた。食べていると、二人のホストが私たちに、プレゼントをくれた。

WALES らしいものもあれば、アクセサリーやマニキュア、一番うれしかったものは、4人でとった写真を入れた写真立てだ。こんなに自分たちのことを考えてくれたのだと思うと、こみ上げてくるものがあった。その後、とても広い Robin の家で、農業用の車に乗って、広大な敷地を走り回った。4人で爆笑して、自然に囲まれて、夢みたいだった。西村さんと Megan が作ってくれたアイスを食べてから、Robin の教会仲間とハイスクールミュージカルを見た。私は、全くミュージカルや映画に詳しくないので、日本に帰ってからもっと勉強したいと思った。あっという間に一日が終わってしまった。

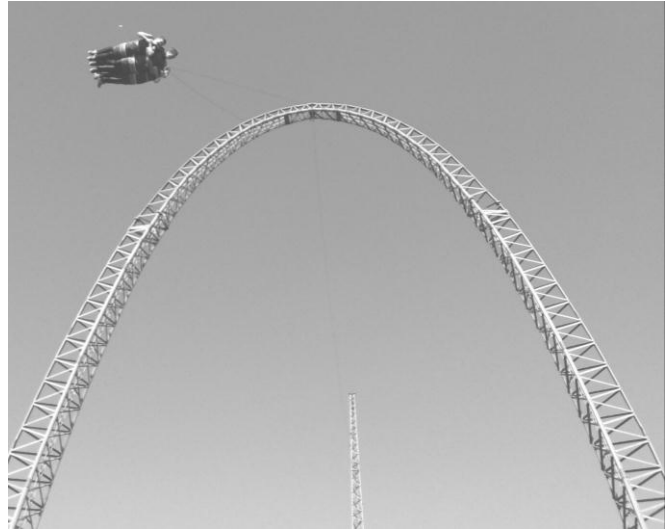


2年生 岩間

7月15日（水）

9時20分頃、ペングライス高校を出発してOakwood Theme Parkへ。この日は遠足の日だったので、私たちの他にもたくさんの小学生がバスに乗っていた。2時間近くバスに乗って、11時30分頃到着。16時頃まで遊んで、再びバスでペングライス高校へ。その後、生徒たちはホストの生徒と食事。卓球ができるレストランに行った生徒もいた。

最初は、ペングライスのキャサリン先生と大手前の兼崎先生と行動する。パーク内に入ってまず驚いたのは、「Panning for Gold」という人間が振り子のように揺られるアトラクション。すごいスピードで人間3人が振り子になっている姿に驚愕した。しかし、見ているのは少し爽快であった。あとからわかったことだが、このアトラクションに乗るには30ポンドもかかるらしい。パーク内には、他にも「SPEED」という名前からして絶叫系の乗り物があり、長蛇の列



ができていた。途中まで並んで結局乗らなかったが、大まかに構造を説明すると垂直に高いところまで上がった後、そのまま垂直に落ちていき、一回転し、ねじれを体感するというもの。生徒によると、ねじれが一番怖かったらしい。

兼崎先生と私は、まず射的場で射的を体験した。狙いを定めて撃つのだが、4~5メートル離れていたため、的に命中しているかどうかはわからなかった。最後に的を取りに行き確認すると当たっている弾もあって嬉しかった。射的場を後にし、他の先生方が集まっている、昼食の場所へ。先生方は、ピクニックのような雰囲気の中、自分たちでパーク内に食べ物や飲み物を持ち込んで会話を楽しんでいた。日本での引率では考えられないほど自由な雰囲気であった。

昼食後キャサリンと別れて、兼崎先生と生徒の写真を撮るためパーク内を回ることにしたが、なかなか生徒に会えなかった。その間、森の中を駆け巡る「Tree Tops」というジェットコースターに乗ったり、「Pirate Ship」という船に乗って前後に揺られるアトラクションを体感したりした。絶叫系が苦手な私でも、ちょうどいいスリルを味わえて満足できた。また、「NEVER LAND」のゾーンがパーク内にあり、ピーターパンの世界をアトラクションで表現しているところにも行った。ピーターパンが、英国でアトラクションになるほど人気であることを知った。

この日は晴れていて暑かったので、水のアトラクションの周りに集まっている人々は皆、しぶきがかかるのを楽しんでいた。私も少し離れたところにいたが、近くにいるだけで涼しさを感じることができた。最後に、濃厚な味のソフトクリームを食べてOakwood Theme Parkを後にした。この1日、海外の遊園地を満喫できたと思う。

引率教員 田中

7月16日(木)

こちらで行動するのもいよいよ今日が最終日。午前は大手前高校で言うところの集中セミナーのような日。事前に満席になっている講座は選べなかったものの、科学捜査、ボードゲーム(英国では大変流行している)、映画などに分かれて参加した。

夕刻、いよいよお別れ会。お世話になった先生方やホストスチューデントとその家族が集まってくれていた。スケジュールの都合でホストを引き受けられなかったものの、この日の朝シンガポールから帰国したばかりという昨年大手前に来た生徒もかけつけてくれた。素晴らしい出会いに感謝し、初日に渡せなかった記念品を渡し、4年前にこの地を訪れた65期の久保田くんの記念樹の前で写真を撮ってお別れをした。

今日は最終日!という実感はなかなか湧きませんでした。朝は化学の実験をしました。実験といってもストーリー性があって化学反応によって殺人犯を特定していくというものであった。残念ながら自分は化学が得意ではなく、炎色反応を楽しんだだけで終わってしまった。2限目は映画を観ました。指輪物語で Osian から指輪物語はとても人気のある映画と聞いていたのですが、字幕なしの洋画はなかなか手強くて意味が理解できず、しょげました。ただ、少し怖いのは理解できました。

お昼ご飯は近くの Art Centre でほぼ全員で小さなテーブルを囲んで食べました。たまたま大学の卒業パーティーが開催されていて Art Centre は非常に活気に満ち溢れていました。お昼の後は歩いて街へ行きました。何度も歩いた道。“自分一人でも Penglais から街へいけるんちゃうか?”と思えるくらい歩きなれた道。明日も歩けるのでは?と思いつついつものように Osian たちとする他愛のない会話。全てが当たり前になりつつあって、自分が非日常の中にいるのが本当に受け入れ難かったのを覚えています。海辺に行って大好きな Honey ice cream をみんなと食べながら海を見つめた時は初日から今日までの日々が思い出されて、”いつか絶対戻ってこよう”と思いました。帰りは歩いて寮へ。最後の最後まであの長くて急な坂は慣れませんでした…。それでも日本よりちょっと速めに歩く British Walking は大好きです。

田中先生に浴衣を着付けしていただいたらいよいよ Farewell Party。お世話になったホスト、先生方を見ると、こんなに素敵な日々を過ごせたことに対する感謝の気持ちと、“ああ、本当に帰っちゃうんだな。”という気持ちが一気にあふれてきました。本当に別れ難くて、たくさんの人と“See you again.”を交わしました。本当に最終日という実感がなかったのと、またここで出会えるようにという願いを込めて、一人一人に話しかけていきました。最後に Osian とハグして別れた後、しばらくまた会えないと思うと寂しさが押し寄せてきました。

I am sure that someday I will see them again just like I did last week. I don't think my goodbye meant “goodbye forever”, but I think it meant “goodbye for now.”



↑ Lorna が作ってくれたケーキ



↑ 久保田先輩の記念樹とみんな

2年生 高嶋

7月17日(金)・18日(土)

午前4時、起床。5時、荷物をバケツリレーで大学寮の前に運び出す。外は小雨。スーツケースを積み込み、6時前に出発したバスは丘陵を超え、霧の立ち込めた渓谷を走る。幻想的な風景が2時間ほど続いたのち、都市部に至る。

9時を回った頃にバーミンガム空港に到着。早起きしたからの眠気なのか、そもそも昨日は徹夜だったのか、バスの中では皆ぐっすり眠っていた。目が覚め、搭乗までの手続きをする間に空港内で軽く朝ご飯を調達し、食べる。昨夜のうちに近所のスーパーで買っておいた生徒もいたようだ。荷物を預け、免税店を少しだけ見て回ったのち搭乗。ほぼ定刻どおりにバーミンガムを出発。アムステルダムに向け海峡を越えるまでの間、低い高度で機体は飛び続けた。英国に別れを告げるように、多くの生徒が窓の外を見ていた。

アムステルダムへは50分ほどで到着。スキポール空港の出発時刻は、現地時刻で14時40分の予定であったが、前の便が遅れているということで時間的な余裕が随分とあった。行き道では急いで通り過ぎた売店をゆっくりと見物し(余談だがオランダは英国に比べ物価が非常に高い。500mlのペットボトルに入った炭酸飲料1本が360円ほどなので、ほとんど何も買わなかった様子)、15時半ごろになってようやく離陸。外は明るいものの、帰りはナイトフライトということで窓を閉め切り、夜の時間を過ごす。

日本時間で7月18日の午前9時半。関西空港に到着。忘れ物がないことを確認した上で機体を降りる。

すぐさま、張り紙を見つける。我々の中の3名の名前とともに「お荷物についてお伝えしたい件がございますので、ターンテーブルの係までご連絡ください」とのこと。嫌な予感は的中し、実際には我々の中からは4名、我々以外の乗客も含めると数十名単位でのロストバゲッジが発生していたことがわかった。行きも帰りものロストバゲッジに怒りとショックがこみ上げる。すっきりとした気持ちで帰国出口をくぐることはできなかったが、疲れはあるものの健康な状態で無事日本に帰って来ることができたというのは、幸いなことであった。

迎えに来てくださっていた川口先生・金先生、そして保護者の方々を見つけ、事情を話し、解散。ロストバゲッジに始まり、ロストバゲッジに終わった交流であったが、挫けず、どんな時も最善の一手を考えて行動できる生徒達であった。彼らとともにこの2週間を過ごせたことを誇りに思い、記録の締めくくりとする。

補記

その後、4名中3名の荷物は連休中に家に届いたが、最後の1人の荷物だけは発見におよそ一週間を要した。

ホストファミリーとの思い出がつまったスーツケースだけに、彼女の不安はひとしおであったと思うが、スーツケースが見つかったと聞いた直後から次の留学を考えている彼女の強さに、心から敬意を表したい。



引率教員 兼崎

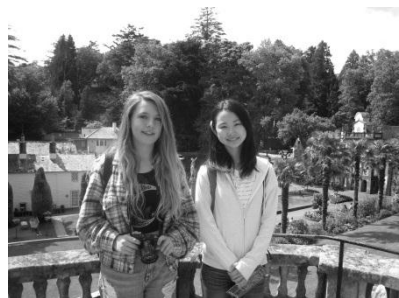
☆ 最後に、旅を終えての生徒全員の感想です。

中島 千夏

イギリスに行くための面接に合格してから出発した日まで様々な気持ちがありました。行きたい！楽しみだ！多くのことを経験しよう！という前向きな気持ちがある一方で、学校で授業を受けたい・・・勉強の遅れをとりたくない・・・という後ろ向きな気持ちもありました。しかし帰りの飛行機で、「派遣していただいて良かった！」と心から思いました。

なぜならイギリスで過ごした二週間、私は学校の机の上では絶対に学ぶことのできないことを数えきれないほど経験したからです。経験といってもすべて楽しいものであったわけではありませんが、すばらしいものであったことに間違いはありません。

これほど英国交流が濃密なものとなったのは、引率の先生方そしてペングライス校のみなさんのおかげです。特にホストファミリーには本当に感謝しています。私のために観光プランをくんでくれたり、私の拙い英語を真剣に聞いてくれたり・・・。



中身の濃い時間は過ごせませんでした。二週目のホストであるアリーシャとはとても馬が合いました。お互いのジョークで笑いあったり、恋の話をしたり、まるで日本人の友達のように心から楽しんで話せました。彼女が「もし千夏がウェールズに住んでいたら、きっとあなたは私の親友になるわ」と言ってくれた時の喜びといったらもう言葉にすることができません。



英国交流はまだ始まったばかりだと私は思っています。イギリスで知ったことや体験したことを伝えたり、私生活に生かしたり・・・それが私の使命です。金蘭会の方々の援助を無駄にすることのないよう、今後も精一杯がんばっていきます。

角 春佳

Aberystwyth での2週間を通して日本とは異なる景色や文化に出会うことができた。パステル調のテラスハウスが並び、歴史を感じさせる城があり、山と海が近くに見えるという美しい街並み。人は、英語やウェールズ語を話し、ハグなどを用いて感情表現をする。食堂やカフェで注文をすると、日本のように几帳面に量を決めたりせず、店員さんの気分によってお皿に盛られる量が変わる。一見、日本と共通点がなさそうに見えるが、hostteacher や hoststudent、それから Aberystwyth の人たちと交わることで共通点を見つけることができた。それは、周りに対して思いやりを持っているという点だ。カッヤクをした後、hoststudent の Alysha のお母さんは私が寒がっているだろうと思い、車の中を暖房で暖かくしてくれた。お金を払うとき、コインの区別が分かりにくいだろうと、Ruby が傍に来て手伝ってくれた。また、Hanna の妹のお誕生日会に参加させてもらったときには、家族全員がテーブルに集まってお祝いをし、たくさんの家族からのプレゼントをもらった Hanna の妹が、そっとお母さんにお礼を言っていたのを見て心が温かくなった。Aberystwyth にも日本で感じられるものと同じような思いやりがあることを自分で体験できたことで他国に住む人との心の距離を縮めることができた。

去年、Alysha は英国交流で日本に来ており私の家族はホストファミリーをした。今年幸運にも彼女に再会することができたが、英国交流を通して日本が好きになり日本語の勉強を始めていると話してくれた。これを聞いてとても嬉しく、ホストファミリーとしての

役割を少しは果たせたのだろうと安心した。用意してきた日本文化を紹介するプレゼンによって、より多くの Penglais 生に日本を知ってもらいたいと思い、みんなで頑張ることができた。高校生のうちにこのような貴重なことを体験し学ぶことができたのは、英国交流のおかげである。Aberystwyth の 2 週間で得たものを、次はみんなに伝えていきたい。最後に、この英国交流を支えて下さり私たちの準備を最後までご指導いただいた先生方、気にかけて下さった先輩方、本当にありがとうございました。

岩間 結子

私は、長く短い二週間で終えてみて、心からこの英国交流に参加してよかったと思っています。行く前は、部活が代替わりしたばかりだったことや、クラスメイトに迷惑をたくさんかけてしまうことで頭がいっぱいで、正直学校生活に二週間穴を開けてしまうことに対する焦りもありました。準備していく中で、なかなか実際に行くんだという実感が得られず、不安が募るばかりでした。でも、実際に行ってみて初めて、英国交流は、ほかのどの行事にも変えられないすばらしい経験をさせてもらえる研修なんだと気付きました。温かく背中を押して下さった学校の先生方、友達、部活の仲間、そして両親に心から感謝しています。

この二週間で気付かされたことは本当にたくさんあります。やはり、自分の英語力のなさは、恥ずかしいほど痛感しました。聞くときもしゃべるときも、習ったはずの単語やフレーズの意味がぼっと頭に浮かんでこず、何度も悔しい思いをしました。伝えたいことを言えなかったこともたくさんあって、仲良くなりたい、と思っても、打ち解けられないままになってしまったこともありました。でも、長期間英語に触れることで、より聞けるように、しゃべれるようになりたいと思えたので、これからもっと勉強していこうと思います。二週間の間には、しんどかったこともありました。食生活や気候になれるのも、時間がかかり、自分の体に疲れがたまってきたのを感じました。そんなときに、周りにいた先生を含む 11 人のメンバーが気遣ってくれました。共同生活をしていく中で、自分のことは自分であるのが当たり前だという大切なことにも気付きました。

私は、二組のホストファミリーと、一組のホストティーチャーにお世話になりました。それぞれの家庭で必ず、両親の職業と、大学に行きたいかどうかと、大学に行くなら何を学びたいのかについて聞かれたのが印象的でした。自分の将来についてしっかり考えてるのか問われてるのかな、と思いながら答えていました。

そしてなにより、一緒に WALES へ行った 12 人の仲間と仲良くなれたことが本当にうれしいです。一緒に準備をして、遠く離れた土地で過ごした仲間感謝を伝えたいです。

いろんなことを経験し、感じることもできたので、それをたくさんの人にこれから伝えていくことと、来年日本に来てくれる Robin に精一杯おもてなししたいです。もっと広い視野を持って毎日を過ごせるようにがんばります。

中尾 多福

ウェールズに行ってよかった！日本に帰って 1 番に思ったことだ。

もちろんいいことばかりではなかった。ウェールズに着いてまず最初の試練は時差。いつもテスト勉強で遅くまで起きたりしているが、それは嫌々頑張っただけで起きようとしている。しかし、今回は楽しいことが待っているとわかっているのに、起きていられない。人間というのはもろいものだというのを、身をもって実感した。2 つ目の試練は生き物との共存。私は小さいころから生き物とふれあったりするのは苦手だ。しかしウェールズには多くの生き物がいた。馬に餌をやったり追いかけられたり、孔雀が草原を普通に歩いていた。車窓から顔を出すとたいい羊か牛とご対面するし、孔雀か羊の鳴き声で目が覚めることもあった。日本では考えられない動物の量にうんざりしていたが、ある朝、庭に可愛いリスがいて間近で見ることができた。このとき、動物も悪くないなと思った。そして 3

つ目の試練は不潔さだった。ウェールズの人たちは、食事をする前に私が手を洗うのをとても不思議そうに見ることがあった。私は不思議そうに見ているウェールズの人たちを不思議に思っていた。動物に触れた手で食事するのだから。また彼らは雨が降っても傘は差さない。羊の糞があちこちに落ちていても気にせず踏み歩き、その上に荷物を置く。車には草が散らばっているのが当たり前。私には謎だらけで、日本が恋しくなる日もあった。

これだけの試練があったにも関わらず、私はもう一度ウェールズに行きたいと思っている。それはひとことで言うと、楽しかったから。いくら私が文章で楽しかったことを表そうとしても誰にも伝わらないだろう。やはりウェールズに行ってもらいたいのと思う。だから私は、今回選んで頂けてよかったと改めて思った。そしてもっとたくさんの人にこの気持ちをわかってほしいので、今後この交流が続くことを心から望んでいる。

最後に、今回のこの交流を通して、日本のいい部分、悪い部分、両方を知ることができた。それらを受け入れた上で、よりよい未来になるよう、何か自分にできることを探していきたいと思う。

高嶋 あゆみ

英国交流に参加して大手前高校の代表として **Wales** に行くことは中学生時代からの夢でした。選考は激戦となり、選ばれたときは信じられませんでした。 **Wales** で過ごした日々、出会った人々は私の一生の宝物です。

最初は選ばれた他の9人ともぎこちない付き合いで、日本語で現地で頼れるのは先生方とその9人だったので嬉しい気持ちと不安が入り混じったスタートでした。しかし、日々を過ごす間になんでも話し合える強い絆で繋がれるようになったと思います。現地で **Wales** の人と積極的に交流できたのはみんなとの絆が自信になったからこそだと思います。

私が学んだ最も大切なことは“勇気を持つことと優しさ”ということです。普段の日常生活において使わない言語で自分の意思を伝えるのはかなり勇気のいることです。しかし、 **Wales** の人と自分を繋ぐには英語が必要不可欠です。頭ではわかっているがなかなか行動に移せなかった自分に **Osian**、**Penglais** の先生方、生徒さんたちは笑顔で話しかけてくれました。最初はたどたどしかった私の英語でも日が経つにつれて褒められた時は嬉しくて、それが自信に繋がって自分から積極的に失敗を気にせず話しかけられるようになったのだと思います。

17歳というこれからの人生を真剣に考えていかなければならない時期に海外の同世代の人と出会えて交流できたのが今回の最も大きな収穫です。本当に視野が広がりました。同じ高校生でも **Penglais** のみんなは自分よりももっと具体的な目標があって見習うべき点がたくさんあった。次に **Aberystwyth** の街に行ってみんなに会ったときはぜひより成長した自分でみんなに会いたいです！

最後に、これからは全力で学んだことを伝えていきたい！

Thank you very very much for everything!!!!

西村 真衣

私は今回の旅で数えきれないほどの生まれて初めての経験をさせていただきました。始まる前は楽しみよりも不安の方が大きかったような気もしますが、帰国した今、行くことができ本当によかったと心から思っています。行く前に、「とにかく刺激を受けて帰ってきたい」とことあるごとに口に出していました。事実、生活の全てに刺激を受けることができ、そして多くのことに気づくことができました。

行ってから早い段階で思ったのは、自分が今までいかに小さな世界で、物を考えて生きていたかということです。言葉がわからず、“普通のこと”をするのに必死の状況になる

と、普段の自分が囚われていることがとてもちっぽけなものに感じました。また、ウェールズで暮らしている人たちは家族と過ごす時間をすごく大切にしている、私にはそれがとても大きな視野で生活を見ているからこそできることだと感じたのです。今の私たちは（少なくとも私の周りでは）、最終的には遠い将来のためになるからと、ごく近い未来のために時間を使っているように思います。実際には狭い範囲の中で生活を図っているのだと。それが悪いことであるとは思っていませんが、余裕をなくし大切にすべきものを少なからずないがしろにしている部分はあると思います。家族とともに“今”を当たり前を楽しめている姿を目の当たりにし、先のためだけに日々を費やすことが最善ではないことを再認識させられたように思いました。

そしてもう一つ、気づいたことの中で印象深いことがあります。それは、長所は捉え方によっては短所になるし、同じように短所も長所になりうる、ということです。日本との相違点を見つけるうちに、やはりいいなと思うものと日本の方がいいと思うものが出てきました。しかし、そのいいなと思ったことの原因を考えると、日本の方がいいと思った習慣であることが意外に多かったのです。全ての物事が見方によってメリットとデメリットの両方の顔を持っていることを、2週間の中で改めて強く感じました。このことは、これから先色々な文化と交流する上で役に立つことなのではないかなと思います。今の時期に、この年齢でそれを実感できたことは、わたしにとってとても大きなことであると感じています。

ここに書いたこと以外にも、たくさんのことに気づき、感じることができました。ホストをはじめとする、お世話になった方々に、もっと自分の気持ちを伝えたいと何度も思いました。別れ際に感謝の言葉も満足に言えなかった悔しい気持ちも味わいました。受験や点数のためだけでなく、あの方々ともっと話したいという英語を勉強する動機ができました。この素晴らしい経験をさせていただいた、すべての方々に心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

松本 日花里

この2週間をより良いものにしようと、私たちはたくさんの時間を削って準備をしていた。プレゼンの原稿、しおりの制作、写真の印刷など。その間の勉強や部活の両立はしんどかった。でも、今思えば、それは決して無駄な時間ではなかった。現地に行くと、緑の豊かさ、街の雰囲気、すべてが私の見たことのないものだった。その中でのプレゼンは本当に緊張したし、過去の例を聞いていると、突然変わることもあるといわれてドキドキしていたが、当日はうまくできた。それは前もってしていた準備のおかげでもある。なにしろ、日本人とウェールズ人が一緒になって楽しめたのが一番良かった。特に妖怪体操のときはみんな笑顔で踊っていて感動したし、そのあとに何人かの生徒が日本文化に興味を持ってくれたのもうれしかった。そのほかにも、ホストとブレスレットを作ったり、遊園地で遊んだり、一緒に笑いあえる時間がたくさんあった。また私は日本人なので、英語を完璧に使えるわけではない。しかし、だからといって伝えることをあきらめようとはしなかった。知っている単語でなんとか話して、からだを使ってなんとか自分の意思を伝えた。とても分かりにくい英語であったと思う。それにもかかわらず、現地の人々は懸命に理解しようとしてくれた。もし、そこで私が英語を使うことをあきらめて、黙り込んでしまったらここまで楽しく、有意義な時間を過ごせていなかった。だから、これから海外へ行くことがあれば、どんどん恥ずかしがらずに使っていくべきだと思った。実際、それによって後半は英語も少しスムーズに話せたし、現地の人々との会話がよりテンポよくできた。最後に、この英国交流で得たものはとても大きかったので、これからの国際交流に生かしていけるように学校生活を送っていきたい。

河村 晴実

中学3年のときの説明会で聞いてから、ずっと参加したいと思っていた英国交流。合格通知をもらったときは夢のようでした。私にとって今回が初めてのヨーロッパで、未知の世界にとってもわくわくしていました。

ところが私はプレゼンの用意などで、他の代表生徒のしっかり度に自信を失います。英語も勉強不足でしたし、楽しみが不安に侵食されていくなか、私は日本を出発します。

当たり前ですが、Aberystwyth は大阪とは全く違いました。自然の多さ、おしゃれな建物は映画や絵本のようにでした。Penglais の生徒の大人っぽさにも圧倒されました。初めてのホームステイ、ホストスチューデント達との交流では自分の英語力のなさに呆れました。何とかかなると思っていましたが、予想以上のひどさ。単語からわからないと、何を言っているのか想像するのも一苦勞でした。しかし、不安だったプレゼンは、緊張から何度か文を間違えたり、音声流れないというトラブルもありましたが、全体的に思っていたよりよかったです。向こうの生徒たちは一生懸命聞いてくれ、後でうれしい感想を言ってくれました。実は発案当初は妖怪ウォッチを人前で踊るのは恥ずかしいと思っていたのですが、小学生も Penglais 生も積極的に踊ってくれて、まさかの大盛り上がりでした。全力で踊ったかいはありました。ショックなくらいでできなかった英語も、ホストと積極的に楽しそうに会話をする先輩を見習って、拙い英語で話しかけると、皆優しく対応してくれました。最初は全然話がわからなかったりしましたが、だんだん出来るだけ簡単な単語でわかりやすく話してくれるようになりました。わからないことがあっても丁寧に笑顔で教えてくれ、話すのが楽しかったです。言語が違って、ふざけあったり、一緒に歌ったりできるのは素敵だなと思いました。英語が下手で恥ずかしくても、話しかけてみれば皆優しいんだから大丈夫なんだな、とわかりました。

事前の説明会で校長先生が「恥をかいてきて下さい。成長するために。」とおっしゃいました。私は最初、恥はかきたくないな、と思っていたのですが、結局色んな恥をかいてしまいました。でもおかげでコミュニケーションが取れたり、最終的にはいい結果になりました。二週間一緒に過ごしたことで、Penglais 生とも大手前生とも仲を深めることもできました。こんな貴重な機会に参加でき、とても感謝しています。一緒に過ごした皆と交流を続け、他の人たちに学んだことを伝えていきたいです！

小出 健太

ついに、この2週間の英国交流が終わった。今回、初めて14日間にも及ぶ海外での長期滞在を経験しましたが、もう何から話せばいいのかわかりません。この英国交流に参加することは中学生のときからの願いで、今回、この交流の一員になれたことが嬉しく、誇らしいです。そして、私がこの英国交流で経験したのは、何も英語だけではないという事が私の中では強く心に残っています。それは私にとっては新鮮な異国の景色、慣れない食習慣や食べ物、人などです。そして私が今回の英国交流で一番面白いと思ったことは、人との関わりについてです。私は英国に出発する前から、まわりは皆女子という状況に少し不安を抱いていました。その上当り前ですがウェールズに着けば自分の言いたいことがほとんど伝わらないのです。いや、何かしらの会話にはなっているのです。ただ、元々、自分の気持ちを完璧に相手に伝えるのは難しいのに、言語が違うためにそれが更に難しいのです。

とは言っても、そんな理詰めでの貴重な機会を無駄にすることがないようにと、私は話せるときはできるだけ英国派遣団やウェールズの人々とも話すようにしていました。そうしているうちに、他の派遣団の生徒やペングライスの生徒とも話すことが出来るようになりました。特にカヤック体験やサーフィン体験、スポーツデイの時などは運動を通してコミュニケーションをとることが出来ました。他にも英語でジョークを言われて笑い合ったりと段々と、一緒に楽しむことが出来るようになりました。

最後には不安だった英国派遣団の皆ともとても仲良くなれましたし、ウェールズでの暮らしもだいぶ快適に感じました。例え、彼らとの間に言葉の壁があっても結局は同じ高校生です。だから遊ぶのは私も彼らも好きだし、何よりこの交流に参加している以上、互いの国についてもっと知りたいと思っているのです。だからこそ私は通じ合うことが出来ました。確かに長い人生の中での2週間とはとても少ない時間ですが、この経験は確実に私のこれからに役立つのだと私は思います。それはもちろん英語力やコミュニケーション能力もそうですが、何より自分たちとは異なった土地や習慣の中で育った人達のことを少なからず考えることができるという力です。これからは自分たちが学んだ経験をもとに周りの人や学校のためになるよう尽力したいです。

守實 友梨

今回私が選ばれるとは思ってもせず結果を知って本当に驚きました。私で大丈夫かな？とも何度も思いました。しかし、選ばれたからには責任を持ってしっかりと学んでこよう、と思いました。プレゼンにおいても準備を重ねました。初めての外国、ウェールズでの生活は見るものすべてが新鮮で、とても充実した時間を過ごすことができました。その中でも、意外と日本への興味が高いことには驚きました。前半のホストの Hannah は日本にとっても興味があるようで、部屋にはトトロのポスターが飾られ、日本語の本も持っていました。特に驚いたのは、お昼ご飯を食べる際に「いまから、お昼を食べます」ときれいな発音で話しかけてくれたことです。そこまで日本を好いてくれることに、日本人としてとても嬉しく思いました。

街中でも学校でも使われる言語は英語のみ。最初はとても戸惑いましたが、折角ここへきたのだからと高校入試や授業の文法を思い出しつつ、頑張って話しかけました。後半はホストの生徒や Penglais 校の皆さんとの会話の理解もできるようになり、やはり積極性は大切だなあと思いました。

今回生かした経験を、学校に反映できるよう、これから行動していきたいと思えます。

最後に現地で共に行動したホストの Hannah Jemma Hannah(ハナ)、Penglais の先生、生徒方、そして一緒に行った先生方含め 12 人の皆さん、本当にありがとうございました！

5. 研究報告

ウェールズの食文化

I、マーマイト

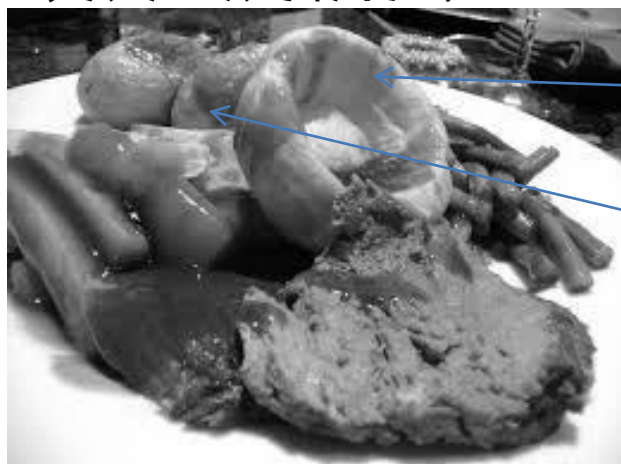


ビールの酒粕が主原料
塩味が強いのが特徴です！！

左の食材を見たことがありますか？
これはマーマイトと言って、伝統的かつ
有名なイギリスの食材の一つで
す。

今回、派遣組の大半がこの食材に出くわしましたが、マーマイトのもつ独特の臭気にギブアップ！！実際にトライした生徒は少なかったようです。しかし、マーマイトは身体に非常によく、ビタミンBを豊富に含んだ健康食品です。

II、サンデーランチ(ディナー)



ヨークシャーピング

パースニップ

サンデーランチ(ディナー)とは、イギリスで昼または夜に食べられる伝統的な食事で、始まりは産業革命の時代までさかのぼります。メニューはヨークシャーピング(パン?)、茹で野菜、肉(魚)、ジャガイモ、パースニップ、カリフラワーチーズ etc.。

このような食事がされるようになったのは、理由として二つの説があります。一つはイギリスの大半がキリスト教徒のため、日曜日にはパン屋でのパンの購入ができず、自家製のパンを焼いて食事をしていたのが始まりだという説。もう一つは、地主が農奴に一週間の褒美として雄牛のローストを与えたのが始まりだとする説があります。

3. Cawl(カウル)



Cawl とはウェールズ語でスープの意味で、ウェールズの有名な伝統料理です。私たちも現地で食べ、おいしくて大好きになりました。作り方は簡単で、羊または牛肉と野菜を大きく切り、煮込むだけ。野菜の種類はじゃが芋、豆、人参、玉ねぎ、リーキ、そしてスウィードととにかく多いです。リーキというのはウェールズを象徴する野菜で、西洋ねぎとも呼ばれるねぎの一種です。スウィードというのは、大根の辛みのないもののような感じで、煮込むと人参と見分けがつかなくなります。そして肉は羊肉を入れるのがスタンダードです。ウェールズでは羊の家畜

畜が盛んで、私たちもそこら中で羊を目にしました。羊が食卓に乗ることも多く、羊肉だけでなく、バター、チーズなどもよく食べられています。しかし、肉が入っていない Cawl を作る家庭もあります。それどころか、肉が一切食卓に乗らない家庭もあります。それらは、ベジタリアンの家庭です。

4. ベジタリアン

米国や英国では人口の 20～30%がベジタリアンであるというデータもあり、実際私たちのホストの半数がベジタリアンでした。ベジタリアンの種類は様々で（右図）、最も多いのはラクト・オボ・ベジタリアンだといわれています。ベジタリアンである理由は、単に肉が嫌いだから、健康に悪いから、環境に悪いから、飢えている人がいるから、宗教的な問題、動物愛護など、様々です。

様々な菜食主義のタイプ

	肉	卵	牛乳・乳製品	魚
ビーガン	X	X	X	X
オボ・ベジタリアン	X	○	X	X
ラクト・ベジタリアン	X	X	○	X
ラクト・オボ・ベジタリアン	X	○	○	X
ベスコ・ベジタリアン	X	X	X	○
セミ・ベジタリアン*	○	○	○	○

*セミ・ベジタリアン 基本的には菜食だが時々肉・卵、乳製品、魚なども食べる

英国の若者の感覚

なぜ調べたのか

私たち日本人の感覚と外国人の感覚は違う。例えば、日本のお寿司は生魚と酢飯だけだが、外国のお寿司はカルフォルニアロールのようにたくさんの具材が入っている。このような、日本人と英国人の好み、感覚の違いに興味を持ったので、調べようと思った。

予想

今回調べたのは、好きな服装、男性、女性を調べた。服装はギャル・着物・ロリータ・制服・浴衣の五つから、男性は二宮和也、佐藤健、福山雅治、GACKT（敬称略）の四人から、女性は大島優子、渡辺麻友、指原莉乃、松井珠理奈（敬称略）の四人から一番好きなもの、人をプレゼン終了後、選んでもらった。ここで、私たちの予想を見ていただきたい。

- ・服装・・・着物（一番日本らしくて、英国では珍しいと思ったから。）
- ・男性・・・佐藤健（日本の若者の中での人気が一番高いから。）
- ・女性・・・大島優子（総選挙で一位になった回数が多かったから。）

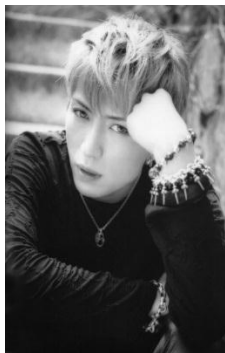
結果

結果はこのようになりました。

・服装・・・ギャル



・男性・・・GACKT



・女性・・・渡辺麻友



考察

服のアンケートでは、私たちがいつも着ているような、

T シャツにジーンズのような服装が人気でした。ペングライスの生徒の私服も、同じような感じでした。思っていたより、

世界的に人気だと思っていたきゅりーばみゅばみゅの服装は、そこまで票が伸びなかったの、あんまりしられていないのかな、と思いました。あまりファッション雑誌などを読む習慣がないのかもしれませんが。

アイドルは、個人差があると思いますが、日本人の好みとはちょっと違う結果が出ました。

私たちが着る服装！
安くてかわいい服が
たくさんあったのが
印象的でした☆



期待したほど人気がありませんでした…



日本でもイギリスでも人気の服装

プレゼンした感想

とても緊張しました。でも、思っていたよりもお客さんの反応が良くて、肩の力を抜いて発表に挑むことができました。AKB48の動画を見せたとき、食いつくように見入っていた姿が印象的でした。ドラえもんについても、たくさんの生徒が反応してくれて、題材に入れてよかったです。

まとめ

日本の文化について、恵まれた場所でプレゼンすることができて、本当に良かったです。本当はもっとたくさん伝えたいことはあったので、全部伝えきれなかったのが残念です。日本は、文化的にとっても発達しているんだな、と感じました。もっと自分の国のいいところを探しながら、毎日を過ごしていこうと思います。

1年 松本 河村
2年 岩間

日本とウェールズのキャラクター比較

*はじめに

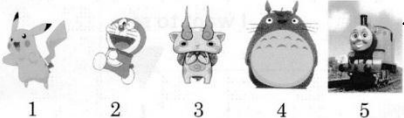
私たちはプレゼンテーションで妖怪ウォッチについて紹介した際に、よりイメージしてもらいやすいようにポケモンと比較しながら話した。ポケモンはウェールズでも認知度があると聞いたからだ。そこで、ポケモンの他にも、現地で有名な日本のキャラクターがあるのか興味を持った。また、ウェールズにも日本と同じような子供向けのキャラクターがあるのか、という新たな疑問が生まれた。日本は特にアニメや漫画、キャラクターといった文化が発達していると聞く。実際にはどういう違いでそう言われているのか、またキャラクターを比べることによって、国民性もわかるのではないかと思い、この研究テーマにした。

*方法

プレゼンテーション終了後、Penglaisの生徒、先生方にアンケート（図参照）を配布し、記入してもらった。協力に感謝。

Hello! we are students of Otemae high school in Japan.
We are studying about the difference between Wales and Japan.
Please answer following questions

1 They are popular characters among Japanese children.

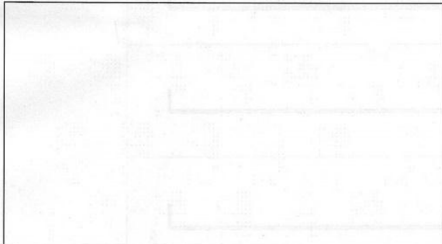


(i) Which character (or characters) do you know?
.....

(ii) Please choose one character who you think is the prettiest!
.....

2 In Wales, do you have characters like these? And if you know, please draw them!

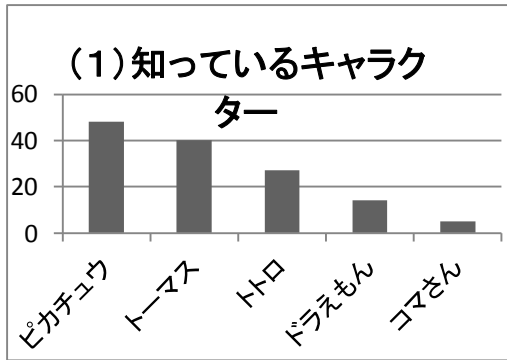
Name of the character(s)
.....



Q 1, ピカチュウ、ドラえもん、コマさん、トトロ、トーマスの中から、①知っているもの②一番かわいいと思うものを選んでもらった。

Q 2, 知っているウェールズで人気のキャラクターを書いてもらった。名前だけでなく絵も描いてもらうようにし、絵柄の違いも分かることができた。珍解答(?)もあり、なかなかおもしろい結果に。

* 結果と考察

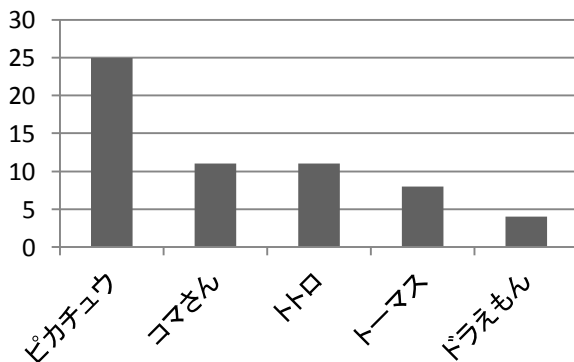


1位はピカチュウで48票。続いて2位はトーマスで40票。3位はトトロで27票、ドラえもんは14票で4位、最後に妖怪ウォッチのコマさんが5票という結果になった。

1位のピカチュウはさすが。イギリスが生み出したトーマスよりも得票は多い。実際に英語版のポケモンカードが売られているのを見かけた。

日本ではジバニヤンという新たな強敵がいるが、海外ではまだまだ戦っていけそう。強いぞポケモン。3位はトトロ。トイストーリーにも友情出演しているぐらいだからもう少し知られているかと思っていた。4位のドラえもんは、まさしく“知っている人は知っている”という感じ。コマさんに5票入っているのは、おそらくプレゼン内で見かけたからだろう。実質0票であると思われる。組み合わせで多かったのは、ピカチュウとトトロとトーマスだった。日本に興味がある人はポケモンのみならずトトロも、という具合だろうか。

(2)一番可愛いと思うキャラクター



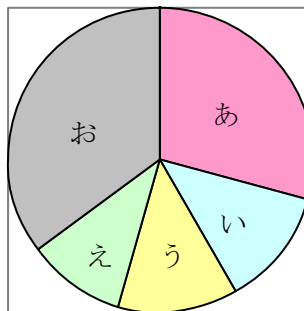
1位はここでもピカチュウで25票。同率2位は11票でコマさんとトトロ。3位はトーマスで8票、最後は4票のドラえもん。

ピカチュウ人気は根強い。圧倒的に1位だった。2位のコマさんとトトロは、心なしか似たような顔をしている気がする。一見無表情だが、冷たくなく逆に可愛いと感じる独特の顔だ。そういえばキティちゃんも無表情。

もしかすると欧米人と日本人の表情の豊かさの違いと関係があるのかもしれない。全く知られていなかった妖怪ウォッチのキャラクターが選ばれたことは興味深いと思う。残念ながらドラえもんはトーマスに勝てなかった。あくまでも見た目だけの判断なので、中身を知ればまた違うかもしれないと思った。また“one character”と書いていたが何個も答えてくれている人がいて、それだけ可愛いと思われていることが分かった。

(3) ウェールズで人気のキャラクターたち

ウェールズではどのようなキャラクターが人気なのでしょう
 か?アンケート集計結果、58人中 sally mally が 14 人と一
 番人気でした。その次に Mr Urdd(6 人)、トーマス(6 人)、
 peppapig(5 人)とランクインしました。日本でなじみのある
 ものはやはり少ないようです。



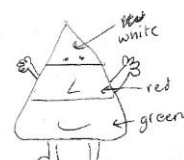
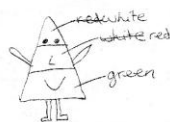
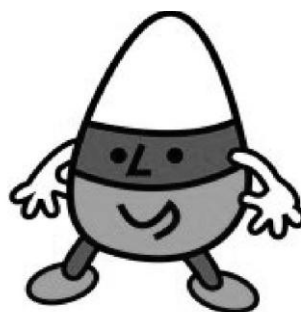
あ ■ Sali Mali
 い □ Mr Urdd
 う ■ トーマス
 え □ Peppa Pig
 お ■ その他

Penglais Students' Pictures

Sali Mali



Mr Urdd



Peppa Pig



皆個性的で、かわいらしいイラスト
 がたくさんあり、見ていて和みまし
 ました。Mr Urdd に至ってはわざわざ色
 まで書いてくれる人がたくさんいま
 ました！優しい生徒さん達です…

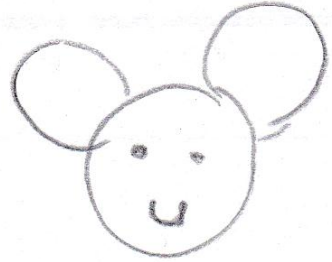
こんなものもあった！名作？迷作？集

(name of the character(s))

Shrek

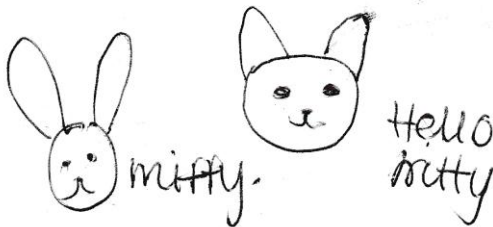


シュレック…あの緑のモンスターでしょうか…

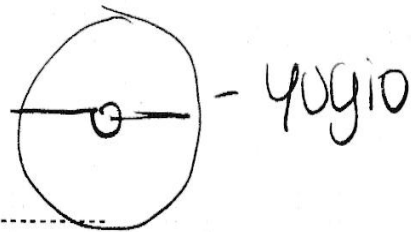


ミッキー、マウス…??口元がとてもかわいらしい!

e! And if you know, please draw



リボンがあれば、完璧!(なはず)



…(´・ω・`)…日本のアニメに興味を持って
くれていることはわかりました、ありがとう!

アンケートに答えてくれた生徒のみなさん、ご協力ありがとうございました!

* 研究を通じて

ウェールズでも日本のキャラクターの認知度は高く、好感を持たれていた。プレゼンで行った妖怪体操も、多くの生徒が踊りを楽しんでくれたようでよかった。日本のアニメ文化もこちらでも発達しているようで、進撃の巨人、デスノート、トトロ等私たちに身近な名前を知っている生徒も多かった。アンケートの中には入っていないが、キティちゃんも町のあちこちで見かけた。(公式…?と思うものもあったが…)ウェールズのキャラクターの全体的な印象としては、大まかでわかりやすく、ほんわかとした印象を感じる。日本の細かいイラストとは大きく異なっているようだ。現地に行った際に感じた、国民の自由で優しい「雰囲気」を表しているような気がする。「キャラクター」というささいなものにも、国ごとに様々な文化が存在することを、改めて学んだ。このこと以外にも、さらなる異文化理解に努めていきたい。

1年 西村・守實

日本の妖怪とウェールズの妖精

日本の妖怪について

今回のプレゼンテーションのために、私たちは以下の3体の妖怪について調べました。

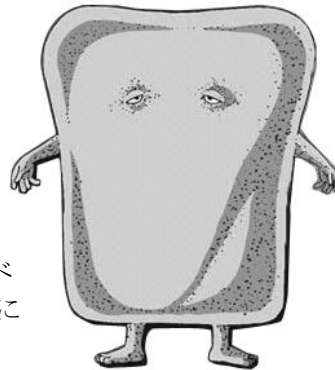
猫又

猫又とは山奥から現れ、時に人に化けたりして人間を襲ったりするしっぽが二つに別れた猫のような外見をもつ妖怪です。江戸時代以降には、人家で飼われているネコが年老いて猫又に化けるという考えが一般化し、前述のように山にいる猫又は、そうした老いたネコが家から山に移り住んだものだと考えられるようになった。そのために、ネコを長い年月にわたって飼うものではないという俗信も、日本各地に生まれるようになったようです。

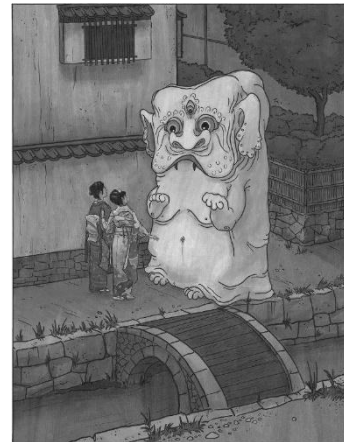


ぬりかべ

夜道を歩いていると、目の前が突如として目に見えない壁となり、前へ進めなくなってしまうというもの。壁の横をすり抜けようとしても、左右にどこまでも壁が続いており、よけて進むこともできない。蹴飛ばしたり、上の方を払ったりしてもどうにもならないが、棒で下の方を払えば壁は消えるという。一見鈍重に見えるが、足腰の筋力を利用するジャンプ力など瞬発力はかなりのもので、とても素早く動くことができたらしい。ちなみに、「ゲゲゲの鬼太郎」などのぬりかべのイメージが定着してしまっただが、江戸時代に描かれたぬりかべとは全く違っていたことが最近分かったらしいです。



(左図) 水木しげるによる近代のぬりかべ
(右図) 江戸時代に製作された妖怪絵巻に記されたぬりかべをもとにした絵



河童

水神の使いと言われており、水中と陸上の両方で活動できる。体格は子供のようで、全身は緑色または赤色。頭頂部に皿があることが多い。皿は円形で、いつも水で濡れており、皿が乾いたり割れたりすると力を失う。河童は悪戯好きだが悪さをしない妖怪として伝えられる場合もあるが、多くは水辺を通りかかったり、泳いだりしている人を水中に引き込み、おぼれさせたり、「尻子玉」を抜いて殺すなどの悪事を働きます。



ウェールズの妖精について

ペングライス校でのプレゼンテーションの時に行った「ウェールズの妖精を描いてください」というアンケートの結果から、帰国後、私たちが調べた妖精について紹介します。

トゥースフェアリー

歯の妖精(Tooth fairy)とは、抜けた乳歯をコイン(場合によってはプレゼント)に交換してくれる妖精です。西洋では抜けた乳歯を枕の下に置いて寝ると、寝ている間にやって来て、歯を持ってその代わりにお金や小さいプレゼントを置いて行きます。歯の妖精はきれいな白い歯しか持って行かないため、「きれいに歯を磨かないとトゥースフェアリーが来てくれないよ」などと言って子供たちに歯を磨くのを促すのだとか。

(右図は歯を入れるための Tooth Fairy Box)



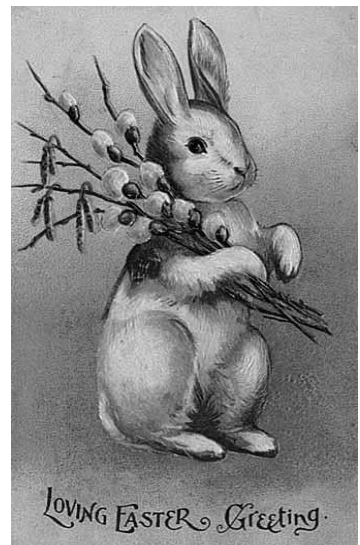
サンタクロース

日本でもかなり有名な、彼が妖精としてアンケートに書かれていました。そもそもサンタクロースの起源はトルコのミュラの司祭だった聖ニコラスだといわれています。ある日、家が貧しくこのままでは娘を売らなければならないという家庭の事を聞いたニコラスは、煙突から金貨を投げ入れました。その投げた金貨が暖炉のそばに干していた靴下の中にはいり、その家族は窮地を脱することができたらしいです。サンタが煙突からやってきて靴下にプレゼントを入れていくというのはここからきているようです。また、サンタクロースの赤い衣装も聖ニコラスの司教の儀式の衣装が赤で、それは「自分の命をかけて、血を流しても人々を助ける」ということを意味しているそうです。



イースターバニー

イースターバニー (Easter Bunny) とはいエス・キリストが処刑の3日後によみがえったことを記念して行われる復活祭においてイースターエッグを運んでくるとされるウサギのことである。このウサギは、カラフルな卵やキャンディ、ときにはおもちゃをバスケットに入れて子どもたちの家に届けるらしいです。



プレゼンテーションやテーマ研究を終えて

今回、日本の伝統的な妖怪をプレゼンテーションで紹介するため、私たちは妖怪についての本を図書館に行き探したりしました。いろいろな本に目を通し、込み入ったことはネットで調べ、自分の紹介する妖怪については何を聞かれても大丈夫だと思っても、本番では予想外の質問が出て曖昧な返答しかできなかったのが辛かったです。そして、私たちはまだまだ日本について分かっているつもりだったのだとも思いました。ウェールズの妖精についてはここに紹介したもの以外にもユニークな妖精がいくつかいて、とても興味深かったです。さすがに、キリスト教徒であって宗教的なものがほとんどでしたが…。中には悪い妖精もいたようで、こうなってくると日本の妖怪とウェールズの妖精も姿が違っただけで、あまり変わらないのだと思え勉強になりました。

ペングライスの生徒の皆さん、アンケートにご協力頂きありがとうございます。



小学校で日本文化を紹介しているところ 妖怪体操を踊っています（7月7日）



ペングライス校で日本文化の紹介をしているところ（7月8日）

1年 小出
2年 角 高嶋

6. 現地でのプレゼンテーションの流れ

○7月7日(火) Ysgol Gymraeg にて

- ・ 日本の紹介

世界地図を使い日本の位置を確認

- ・ 大手前高校の紹介

大阪城の紹介から大手前高校の名前の由来を話す

- ・ 簡単な日本語講座

こんにちは、ありがとう等

- ・ 日本の子ども達が好きなキャラクター紹介

「ようかい体操第一」を児童と一緒に踊る

- ・ 児童にお礼として歌を歌ってもらう

- ・ 記念写真を撮影



○7月10日(金)/7月14日(火) Penglaisにて

- ・ 校長より大手前高校の紹介



- ・ 浴衣で阿波踊りを披露

正調阿波踊りをステップと腕の動作に分けて解説、会場全員で踊る



- ・ 日本のファッションについて

浴衣の紹介の他、
原宿ファッション、
Visual系、
コスプレなども紹介



- ・ 日本のキャラクター文化について

ドラえもん、ピカチュウ、ジバニャン等、
日本のアニメキャラクターを紹介し、「よ
うかい体操第一」を一緒に踊る



- ・ 古典的な妖怪の文化を紹介

キャラクター文化は現代のみならず、何百年も昔から愛されてきたものであることを話す。

- ・ アンケートを実施

事前にグループ毎に決めていた研究テーマに沿ってアンケートを実施



第7回 英国派遣（2015年7月4日～18日）報告書

2015（平成27）年9月発行

発行：大阪府立大手前高等学校
国際交流委員会

〒540-0008 大阪市中央区大手前2-1-11

TEL：06-6941-0051 FAX：06-6941-3163

URL：<http://www.osaka-c.ed.jp/otemae/>